

テストレポート

ニコンFM

ボディナンバー 2102926
 レンズナンバー AIニッコール
 50mm F1.4 3959344



東京工芸大学新型カメラ検討グループ

保積英次

加藤春生

田中益男

田村寛

畑鉄彦

■はじめに

日本光学が1959年6月にニコンFをもってスタートさせた同社の35ミリ一眼レフカメラの歴史は、今日までにF系のカメラ8種、マート系のもの6種、さらにレンズシャッター系のもの4種と、18種の多岐にわたっている。これに今回発表されたAIシリーズの4機を加えると22種のニコンカメラが登場したことになる。

この間にあって、1974年おしまれつつもその生産が中止されたニコンFは、名機の名をほしいままにして15年というロングランを続け、戦後のカメラの長寿命の記録を作っている。

このニコンFから今回のAIシリーズのカメラまでの歴史をたどってみると、まさしくそれはカメラとレンズと露出計のドッキングの発展の歴史ということが出来る。しかし、この間1971年9月のニコンF2の発表までの12年間は、すべての発展がニコンFのボディを中心に行われ続けてきたことは、いかにFの基本設計がすぐれていたかを物語るものであり、あえていえば露光量制御のシステムはF2にいたっても、Fの方式を踏襲したものであり、その意味では18年間の実績をもつものといえる。

露出計とのカブリングは、ニコンF発売当初よりクリップオンタイプのセレン光電池式のメーターを、銘板を利用して取付け、シャッターと絞りに連動する方式をいち早く採用していた。その後、ペンタプリズム部に外光式のCdSメーターを組込んだニコンFフォトミックが1962年に発表され、さらに3年後、同じ型式で開放測光・平均測光式のTTLを採用したニコンFフォトミックTが、また1967年には開放・中央重点測光式のTTL、ニコンFフォトミックTNが発表されている。さらに、1968年になると前年発売されたニコマートFTNに採用された、開放F値簡易セッティング機構をもつ、ニ

コンフォトミックFTNが登場し、以下ニコンF2への展覧が続いていくのである。

このような測光方式の発展を同一のボディでなしとげることができたのは、ペンタプリズム部が着脱可能であり、この部分だけで外光式からTTLまでの測光システムを処理し得たことが、最も大きな原因といえるが、もう1つ忘れてはならないことに、最初のレンズから露出計連動部の爪を持っていたことがあり、この爪を介してレンズの絞りの情報がメーター側に送られる方式がスタート時点で確立していたことが、大きなメリットとして作用している。

このようなニコン発展の1つの大きな役割りを負った連動部ではあったが、今日的な立場から見ると、レンズのセッティング、開放F値のセッティング、接写リング等のセッティングなどに多少の不便さがあり、セット不良がそのまま測光誤差につながるデメリットがあった。このような問題点をなくすために登場したのが今回の開放F値自動補正方式・AI (Automatic Maximum Aperture Indexing) である。

このAI方式はボディ側とレンズ側、両者のカブリングシステムのこれまでのいわゆる外爪方式が変更されたわけで、当然AI用のレンズとともにAI方式のレンズボディが必要になってくる。これが今回発表された、ニコンF2フォトミックA (ニコンF2)、ニコンEL2、ニコマートFT3とニコンFMの4種であり、前3者はそれぞれ先行機種種のAI化または改良機と考えてよく、その意味でのほんとうの初顔といえるのはニコンFMとすることができよう。

■外観・デザイン

本稿の目的だけからすれば、新製品のニコンのテスト結果を述べることでよいわけであるが、ニコンF発売以来560万本近く生産されているといわれる、Fマウント

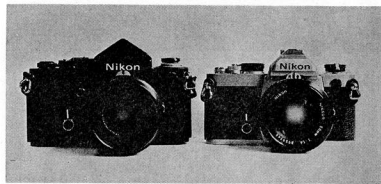


写真1 ニコンF2(左)とニコンFM(右)

のニコールレンズとのかかわりで、重大な内容をもつAI化の過程をまず歴史的にながめたところで、本論に入っていきたい。

まず、ニコンFMの外観の特徴をひとことではいえず、ニコン初のコンパクトカメラということができよう。たしかにニコンF2やELと並べて見たとき、ひとまわり小さいという感じがつくするが、実際に大きさを比べてみると、ELとで横幅は約3mmしか異なっておらず、その小型化された印象のほとんどは、ボディの肩までの高さからきているようだ。ペンタ部のトップまでの高さは約4mm小さくなっているだけであるが、肩の高さで見ると約8mmぐらい低くなっており、ペンタ部が小さくなったこととあいまって小型化の印象をもつといえよう。

全体の印象がコンパクトになったのに対して、ペンタ部がかなり細長くなった感じがするが、数字的にもFMのほうがELより5mmほど長くなっている。これはレンズのマウント基部にある絞り目盛りの数字をファインダー内に誘導する窓を設けたためである。

また、シャッターダイヤルもこれまでのものに比べてひとまわり大きくなっているが、これはフィルム感度のセッティングをここで行うためであるが、この径が大きいことはむしろ操作性を高める結果にもなっている。

■ファインダー

ファインダースクリーンは中央が水平方向のスプリットイメージになっており、その周辺がマイクロプリズム、その外側はフレネルの刻まれたマットになっており(図1)、最近各社で最も多く採用している方式である。マット、プリズム、スプリットの3種の機能をうまく使いこなせばたいへん扱いやすいだろう。

ファインダー視野は左側にシャッター速度、上部にレンズの絞り環を直読できる絞り数字が、そして右側に露出計の指示が赤色のLEDの点灯によって示されるようになっている。絞り数字は連動爪の陰になって少し見にくい場合もあるが、F4とF8の所には明り採りが設けられており、いちおうこれらの表示を見るのにはあまり不便は感じられない。もちろんこの場合、AI専用に進

動爪を外してしまえばさらに明るく見やすくなるのはいうまでもない。しかし3種の表示を1度に見ようと思ってもむずかしく、特にめがねをかけている人はおのおのに則して意識して目を動かしてやる必要がある。せめて2ヵ所で全部が見えるとうよいのだが。

光学系の合理化によって全体を小型化することに成功しており、プリズムカバーもコンパクトな外観となっている。

■シャッター

シャッターはコパルの縦走り金属幕フォーカルブレン、CCS-M1型を採用しており、先幕と後幕の枚数はおのおの5枚と3枚となっている。

ニコマート系のカメラは従来からコパルのシャッターを採用してきたが、初期のニコレックスを除いて、シャッター速度の調節およびフィルムの感度設定機構はレンズマウントの基部に設けられていた。今回のテスト機であるニコンFMはそれらの機構をボディ上部に移し、最も一般的な方式となった。ファインダーを見ながら行うシャッター速度の変更は、ニコマートを使っていた人にとっては少しやりにくいかもかもしれないが、この方式は一般的な方法なので慣れればさほど問題はないだろう。

シャッターの作動は同種類のシャッターを使っている他のカメラに比べて、作動音、ショックともにまろやかさが感じられ、ブレーキ機構、エアダンパーなどを採用した努力の効果が上がっているといえる。ミラーの作動の感じもニコンF2には及ばないものの、かなり素早い動きである。しかしそのためかシャッターリリースにともなって動く部分の質量が大きいに感じられる。これはボディが小さくなって軽くなったぶんだけ余計にそう感じられるのかもしれない。各メーカーでボディの軽量化が推進されてきたが、本来のカメラの機能を見ると、むしろ作動部品の軽量化を先行させるべきで、その軽量化の進みかんによって、ボディの軽量化の程度が決まるべきではないだろうか。音が大きいのとショックがすごいので有名なブローニーの一眼レフを、重い水中用のハウジングケースに入れてシャッターを切ると、作動音が静かになるのとショックがほとんど感じられなく

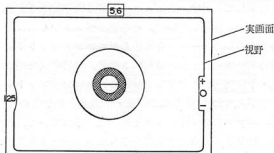


図1 ファインダー視野